

藩校・養老館について

養老館は人材育成のために萩の明倫館を参考にして開校しました。開校にともない石碑が建立され、その碑文を記した人物は玉乃九華といい、儒学者で藩主の信任の厚い人物でした。

学校設立以前、士族の子弟の教育施設「講堂」は二か所ありましたが、学校設立急務の要望が高まり、加えて建物の老朽化もあり、改築の必要にせまられていました。

そこで、弘化二年(一八四五)、経幹は、用人の佐武晋に命じ、萩本藩の明倫館を習って準備を進めます。翌年六月には起工式を行い、弘化四年五月に完成しました。

場所は御館(岩国市横山)の近くに建てられ、名前は養老館とします。これは、樋口蘭畹の『節儉略』より採用されたものです。

開校の前、大組、手廻組、七間通に対して学則が公布されました。

一、此度学校御造、養老館と御唱させ被成候。

年齢十三歳より三十歳迄の面々、文武稽古出勤可有之候事。

一、文武稽古日割左の通

(師家) 桂六左衛門 片山金助。

二・七 文学、朝五つ時(午前八時ころ)より八つ時(午後三時ころ)

弓術、八つ時より  
(師家) 渡辺卓平。

三・八 槍術半日宛。

(師家) 山県勘作・田中栄蔵。  
四・九 劍槍半日。

(師家) 筏次郎右衛門  
朝枝善之助。

五・十 文学、朝五つより八つ時迄。  
弓術、八つ時より。

(師家) 岡本判左衛門

同月二十日に開校式を行い、館内に聖廟を置き、祝典の礼を行い、養老の典をあげました。

翌年、熊本藩の横井樟南が藩校を訪ねた記録によりますと、この霊像は大内家の旧蔵にて吉川元春が入手し宝庫にあつたとされ、開校を機に聖堂に安置したものと説明を受けたとあります。養老館では、十三才から三十才までの士族の教育施設で、下級士族の子弟の入学には制限があり、次第に緩和されました。

十三才以下の子弟は素読寮で句読を学び、ただし、足軽階級の場合、武技専修すべきで、文学聴講は許可されませんでした。

組織は、総裁、学監・学頭・教授・助教・司筵・訓導・執法・書記を置き、武技には、各々師家を置き、その下に執事と助師がいました。

授業内容は、経伝子史詩文で、弘化五年より和歌連歌が加わりました。

開校後の改定  
嘉永元年(一八四八)には改定がさ

れ、極貧または病弱者に限り全過程の履修から二、三の履修でよいと変更になりました。

さらに安政六年(一八五九)、文武考試の実施と一部が改訂されました。改定は次のとおりです。

一、四十歳まで延長すること  
一、武芸各流に取立役および試合頭の制度を定めること。

一、組外通の入学許可。  
一、小組通の文武一芸は願出なしに出勤可能

この改定後、十八才になると文武考査の制度が施行され、春と秋の二期にわたります。

不合格者は再試があり、二十才に至るも合格できない者には一方のみの試験が例外的に認められました。

原則として合格できないものには家督相続も役職登用も許されませんでした。



養老館石碑

現在、岩国市立岩国小学校の校庭に移転されている。

(原田史子)

また、戸主には退隠もしくは俸禄が削減されました。文武どちらかに傑出した者で二十歳以上になれば一段と厳しい試業よって専業を許されました。試験制度もとのい、人材育成を歩んでいた藩校ですが、慶応二年(一八六六)一月二十八日、養老館は焼失してしまい、馬見所のみが類焼をまぬがれたのです。

慶応二年(一八六六)十一月に諸隊編成があり、少年にも入隊するものが多く、学業の再開のめどがたちませんでした。翌年二月二日に、八歳から十五歳までの子弟に文学専修を命じ、その施設として素読寮が開業し、これは明治二年まで続きました。この素読寮から東芝の創業者のひとり藤岡市助が輩出されています。